

## 関一と大阪商科大学と柳田国男

2018年3月25日のレポートで、関一市長による「市立商科大学の前途に望む」(『大阪』第4巻4号、1928(昭和3)年4月)を全文紹介した。大阪市立大学の統合再編に怒りを感じたからだ。宮本憲一「関一と大阪商科大学の創設」(『大阪の歴史』18、1986年)のなかに、大阪商科大学の建学の精神をもっともよくあらわしているのは、さきの関市長の格調高い一文であるとして、次の一節を紹介している。

「今や大阪市が市立商科大学を新に開校せんとするに當って、よく考へねばならぬ事は、単に専門学校の延長を以て甘んじてはならぬ事勿論であるが、又国立大学の『コピー』であつてもならぬ。固より大学と言ふ以上は単純なる職業教育だけでは満足が出来ぬ。学問の研究が中心であると共に、その設立した都市並に市民の特質と、その大学の内容とが密接なる關係を保つべきことを忘れてはならない。其設立都市の有機組織と其都市の市民生活の内に市立大学が織込まれなければならない。併し決して市民に迎合せよと言ふのでもなければ、早く間に合ふ卒業生を送出せよと願ふのでもない。若しそれだけの目的ならば専門学校で沢山である。市民の市立大学である以上、其所在都市の文化、經濟、社会事情に関して、独特の研究が遂げられて、市民生活の指導機關となつて行かねばならぬと思ふのである。大阪市立大学は学問の受売卸売の市場ではない。大阪市を背景とした学問の創造が無ければならない。此の学問の創造が学生、出身者、市民を通じて、大阪の文化、經濟、社会生活の真髓となつて行く時に、設立の意義を全くするものである。」

宮本論文に柳田国男についての指摘もあり、研究会で報告するうえで参考になった。

関一とは反対に、行政官から野の研究者になり、関の近代化論・都市論と対照的に土俗論・農村社会論から独自の日本論をつくりつつあった柳田国男は、大阪商大発足の年に『青年と学問』において、大学のあり方に根本的疑問をなげかけた。

「学問というものが、たんに塵の浮世の厭わしいゆえに、しばしばこれは紛れ忘れようとするような、高踏派の上品な娯楽であるか、はたまた趣味を同じうする有閑階級に向つて、切売小売をなすべき一種の商売であるならばいざ知らず、断じてその二つのいずれでもないことを信じながら、なおこれほど眼前に痛切なる同胞多数の生活苦の救済と、いまだなんらの交渉を持ちえないというのは、じつに忍びがたき我々の不安であつた。それがこの頃になってから、たとえ少しずつでもしだいにその応用の途に目を着けようとしてきたのである。……」

柳田国男のもつ危機感にたいして、大阪商大はいくぶんなりとも応えうる学問研究をしようとしていた。だが、その自由と自治をゆるさない状況が、昭和恐慌をきっかけにしてはじまろうとしていた。ファシズムは民衆の大学にたいする不満を逆手にとって上から改革をはじめた。

(2020年5月11日)